



## 幼稚園の問題 いろいろ

毎日毎日、幼稚園では、さまざまな問題が起きます。そこで、そのいくつかをここでとりあげてみたいと思います。

### ○ かたづけについて

かたづけについては、次のような疑問が、おこります。

- ・「かたづける」ということは、どんな意味をもつか。
- ・どんな価値をもつか。
- ・プログラムの上における「かたづけ」の

位置づけは、どうなっているか。

- ・「かたづけ」のやり方が、結果においてどんなちがいを生じさせるか。
- ・子どもはかたづけをどう考えているか。
- ・おとなのもつ「かたづけ」の概念が、子どもにどのような意味をもつか。

これらの疑問の中には、すぐに答の出てくることがあれば、解答をもたないものもあります。そこで、ここでは、いろいろの実例をもとにして、考えてみたいと思います。

### やり方

ある幼稚園では、音楽が鳴り出すと、子どもたち全員が、遊びをやめて、いっせいにかたづけはじめ、わずかな時間に、子どもたち自身の手で、かたづけ終わります。ある幼稚園では、「おかたづけをしましょう」という先生の声がかれてから、三十分近くもかかっています。この二つのやり方のちがいを考えてみますと、前者では、非常に整然としていて、時間がかからないという点は、すぐれています。子どもたちの行動は、かなり反射的で、自分自身の考えや選択はあまりみられません。

一方後者の方は、ややもするとガラガラとなりがちですが、そこに子どもの自発性というものが培われていくように思えます。早くかたづけることばかりでなく、そこに子どもの創意・くふう、相互協力ということをのびしてやりたいと思います。

### 時間の余裕

「おかたづけに三十分もかかるというのは、時間が、かかりすぎるのではないか」という人もあるし、「三十分かけてもいいのではないか」という人もありますが、部屋中いっぱい遊具を出して、子どもたちが、十分に遊びを楽しんでいたのなら、それをかたづけるのに三十分かかってもいいでしょう。遊びの活動に十分時間の余裕をもたせることが、必要だと思います。かたづけをすることが自体、一つの活動であり、経験であるからです。

### 遊びとかたづけの区別

「自分たちのところは、かたづけ終わって、他のところで遊んでいる子どもがいる。遊びとかたづけの区別がないのではないか」自分たちで遊んだものは自分たちでかたづけます。しかし、自分で遊んだものをか

たづけたという解放感とともに、次に何を  
してよいかわからない状態になります。

そのために、遊んでいるのではないでし  
ょうか。このような場合、遊びとかたづけの  
間に、はっきりした線をびくことはむずか  
しくなり、かたづけは、遊びのつなぎ目と  
しての役を果たしているように思います。

かたづけしている子どもと遊んでいる子ど  
も

「かたづけ終わって遊んでいる子どもは、  
かたづけしている子どもの邪魔になっている  
のではないか」

所在ない気持でいる子ども、手のあいて  
いる子どもたちを集めて、次にするものの  
準備をさせることが、それを解決させるで  
しょう。特にかたづけが遅れている所を手  
伝うようにいたり、レコードをかけると  
か、その間を活用し、次の活動に入るゆと  
りとするとうまくいっているようです。

### 先生の態度

ある先生は、「おかたづけですよ」とい  
っただけで、子どもたちがどうするかみて  
いました。しかし、あまりそれに従う子は  
いませんでした。また、ある先生は、自分

でもかたづけはじめて、言葉と一緒に行動  
にもあらわしました。

キャサリン・H・リードは『提案を効果  
的にするために、いくつかの技術を一緒に  
用いることが必要なときがある。ことばで  
はつきりと提案しても、それだけでは十分  
でないことがある』（K・H・リード著

宮本美沙子訳『幼稚園』昭和41年 フレ

ーベル館刊116頁）といっているように、た  
だみているという態度も、反対にうるさい  
ほどに口をだすのも効果がありません。子  
どもの届かないところは先生が手を貸し、  
あとは子どもたちの手でかたづけるという  
態度がなくてはならないと思います。

リードも『数人の子どもたちが一緒に遊  
んでいるような時、ある子どもは、ほかの  
子どもたちよりも早く提案を受け入れるこ  
とができる。グループの中で一人の子ども  
が提案を受け入れてくれれば、他の子ども  
たちにもそうさせる機会が強まる。グルー  
プに影響を及ぼしたいと思う時、どの子が  
まず最初に提案を受け入れるか考慮に入れ  
ることは賢明である』（前記『幼稚園』117  
頁）と述べていますが、これはおかたづけ

をする際に、効果的に用いられる方法だと  
思います。

かたづけについては、もっといろいろ、  
考えねばならないことがあるでしょう。実  
際指導の上で研究を続けていかねばならな  
い問題です。

○ 子どもとおとなの考え方のちがいに  
ついて

- この問題の根底となる要素はなにか。
  - どんな場合に問題となるのか。
  - それによってどんな支障がおこるか。
- というような疑問がおこります。

ある幼稚園で、こんな場面をみました。  
子どもたちが、部屋の真中でくみあってい  
ました。そのまわりでは、みている子ども  
たちが「ーちゃんガンバレ」「しっかり！」  
と応援しています。そこへ先生が通りかか  
り、「あら、おすもうしているの」といつ  
てしばらくすると行司の子どもをおき、子  
どもたちを二組に分けて順番にくみあわせ  
ました。先生もそばで応援したりして子ど  
もたちと一緒にいましたが、用ができたらし  
く途中でその場をぬけました。先生が、  
用を終えて帰った時には、子どもたちは、

みんな他の遊びに散っていました。保育が終わってから、その先生にその時のことを伺ってみますと、先生は、「ちょうど通りかかったら、二人の子どもが、くみあっていて、他の子どもたちも熱心に応援していたので、おすもうの遊びをもっと発展させてみようと思って、みんながかわるがわるくめるようにしてみました」と述べ、「子どもたちがころげまわったり、くみあっていることだけを楽しんでいるのだとは考えなかった」とつけ加えておりました。

もう一つ例をあげてみますと、何人かの子どもたちが、自分のこのみであき箱やえのぐ、セロテープをつかって、製作をしていました。その中の一人は、大きなダンボールを用いて、その上にすわれるほどの大きさのものをこしらえていました。それをみた先生は、「ーちゃんのは怪獣ね」といながら、他の子どもに手を貸していました。するとそばにいた子どもたちも「怪獣だ」といいながら見にきました。その子は、その時は黙っていましたが、しばらくたつと「ぼくの怪獣はね……」ととなりの子に話しているのがきこえました。この二つの

例を考えてみますと、保育者が自分の心に浮かんだイメージを言葉に表わしたり、行動にうつしたりしています。子どもとおとなの考えが一致している時は、問題がありませんが、くいちがっている場合には、おとなの考えが、一方的に子どもに影響を及ぼすことになります。

#### 考えのくいちがい

そこで「考えのくいちがい」という問題が生じます。子どもの遊びを發展させようと考えると子どもに示唆を与える前に、自分が考えていることと、子どもたちの考えていることがくいちがっていないかどうかを考えてみる必要があります。毎日の保育の中で、子どもとおとなのイメージのちがいがあったために、子どもの活動の方向づけにくいちがいが生じていることが多いような気がします。

#### 柔軟性

子どもの考えは、非常に柔軟性に富んでいます。その子どもたちを保育しているおとなは、同じように柔軟性をもつことを要求されます。考えの固まってしまった保育者から子どもは何を学びとれるでしょう

か。そのどこから創造性が生まれてくるでしょうか。おとなは誰でも、今までの経験からわり出したある程度のイメージを、心の中にもっています。そしてそれは、折にふれ、子どもに浸透していきます。豊かな情操と創造力を子どもたちに与えるには、まわりのおとなもその努力をしなければなりません。しかし、あまりおとなが自分の意見をうち出すと、子どもは、折角の發展しつつある考えがそこで止まってしまう。おとなの考えのわくの中で、子どもの考えが發展しているのだとしたら、それは危険なことです。成長し、發展するべき子どもの考えというものを型に入れてしまうからです。

また、幼稚園という職場の中の人間関係にもその柔軟性を必要としています。考えに柔軟性がないおとなの中にいて、どうしても子どもに豊かな創造性、人間性が生まれてくるでしょうか。子どももおとなも、各自の考えが自由に受け入れられるような環境にあつてこそ「子どもとおとなの考えのちがい」という問題について考えることができるのだと思います。

(編集部)